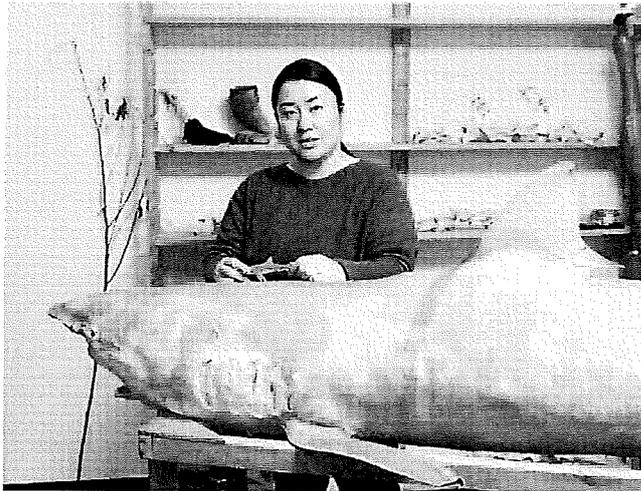


触れて学んで 開設40年

盛岡市東中野の「桜井記念 視覚障がい者のための手でみる博物館」が先月、視覚障害者の文化向上に貢献した個人や団体に贈られる日本点字図書館(東京)の「本間一夫文化賞」に選ばれた。川又若菜館長(39)は「多くの人に知られていない博物館を選んでいただいたことをうれしく思う」と喜んでいる。



サメの剝製とミニチュアを使いながら感触や構造を説明する川又館長(10月29日、盛岡市で)

本間一夫文化賞に「手でみる博物館」

同館は1981年、県立盲学校の教諭で全盲だった桜井政太郎さんが開設した。桜井さんが高校生の頃、博物館でヘビの剝製(はくせい)に触っているところを注意され、「視覚障害者にとって確認するには触るしかない。声だけではなく、触れて学ぶことができる博物館を作ろう」と考えたのがきっかけだった。

クジラの骨やクジャクの剝製などを収集した桜井さんは、自宅を博物館に改装して展示してきた。しかし、2010年頃から体調が悪化し一度休館。川又館長の父親が桜井さんの同僚だったことから、後を継がないかと打診され、11年に館長に就任し、展示物を引き取って再開した。桜井さんが亡くなるまでの5年間、解説方法などを学んだ。

同館のモットーは「百

聞は一触にしかず」。動物の毛並みや虫の模型などを実際に触ってもらい、どのような構造なのかを説明するよう心がけているという。川又館長は「名前と形を教えるだけではなく、プラスチックの説明をして、興味を持ってもらえるよう工夫している」と話す。

館内には現在、動植物などの標本や模型約3000点が並ぶ。展示物にじっくり触れてもらうため、完全予約制だ。見学者の関心や視覚障害の程度を聞き取り、その人に合ったプランを用意する。川又館長は「これからも視覚障害者ファーストで運営していきたい」と話している。

開館は午前9時〜午後5時。見学できるのは、視覚障害者とその支援者、教育・福祉関係者。新型コロナウィルス対策として6人以下、3時間以内。入館無料。休館日は不定期。問い合わせは(019・624・1133)へ。